

土田將雄編

衆妙集

古典文庫

土田將雄編

衆妙集

古典文庫

古典文庫第二七〇冊

昭和四十四年十二月二十日印刷発行

非売品

集	編者
妙	土田将雄
衆	発行者 吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

114 東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

凡例	三
本文	
一、衆妙集	七
二、九州道の記	一三
三、東国陣道記	一四
四、補遺	一四三
五、添状	一四七
解説	一六一
校異	一八七
和歌初句索引	二九

凡 例

一 本書は宇土細川家に伝来し、現在熊本大学松本雅明教授研究室の收藏する飛鳥井雅章筆本『衆妙集』を底本として翻刻し、底本に添えられている雅章等数人の書状を加えた。

一 翻刻に際しては、底本のまま活字に移すことに留意したが、由巳（由己）、愛宕（愛宕）のごとき明らかな誤字は正し、変体仮名や異体漢字を改め、すべて通行の字体を用いることにした。

一 反復記号は底本のままとしたが、仮名の場合は「ゝ」を用いた。

一 見せ消ちは底本に従って「々」を文字の左側につけた。

一 詞書や地の文には適宜句読点を付した。

一 歌番号は諸本と対校するために、本文のすべての歌に付した。したがって題の下に小書されている歌、贈答歌で幽斎のものでない歌にもつけ、また重複し

ている歌も、それぞれの場所で個有の歌番号をもつようにした。（重複歌は、三
〳一六四、五九〳四一八、九二〳五四二、一〇九〳三九二、四〇〇〳五四八、五一一〳
五五二であるが、本文中一六四・三九二・四一八・五一一・五四二は見せ消ちになっ
て
いる）

一 一―六五は詠百首和歌・詠二十首和歌・歌集の歌に、七〇―七六は九州道の記・
東国陣道記中の歌に、八〇―八七は対校本にあって底本にない歌で補遺として掲
げたものに付してある。

一 校異作成に使用した対校本の略号は次のとおりである。

幽 幽齋歌集 高松宮家本

百 詠百首和歌 高松宮家本

東 衆妙集 東京大学研究室本

茶 衆妙集 お茶の水図書館本

国 衆妙集 国立国会図書館本

一 本書の出版にあたり、底本については、使用することを快諾された松本雅明教

授、対校本については、高松宮家を始め各研究室・図書館の御配慮を頂いた。添状の翻刻に際しては上智大学吉村茂樹教授・熊本大学工藤敬一助教授の御援助を受けたが、特に宮内庁書陵部橋本不美男氏にはすべてにわたって終始御厚意にあずかった。ここに記して感謝の意を述べたい。また末筆ながら本書の出版をお引受け頂いた吉田幸一氏には心からお礼申上げる次第である。

昭和四十二年十二月

土田 将雄

一、衆妙集

詠百首和歌

玄
旨

立春

一　をしなへてけふこそかすめ四方山のこのもかのもとに春や立らん

朝霞

二　よもすから聞し嵐も心あれやけさは霞をよきて吹也

谷鶯

三　朝またき霧吹はらふ谷風に先うち出るうくひすの声

残雪

四　降そめしこそその高根にはのくとまた消残る雪をみるかな

若菜

五　誰か先わかな摘らんはなかたみめならふ人の袖のゆきゝに

里梅

六 野へにまつ咲より馴てみれとあかぬ梅の立枝も里をあまたに

簷梅

七 軒^{はより}ちかき梅かゝなから玉簾ひまもとめいる春の夕風

春月

八 かすむへき山のはとをく成にけり曇なはてそ春のよの月

春曙

九 花鳥の色にも音にもかすみのみ猶たちまさる春の明ほの

帰鴈

一〇 おもはすよ都はなれて北に行かりの鳴ねにともなはんとは

春雨

一一 はなみにと出たちもせず八重葎心にしけき春雨の空

岸柳

一二 柳よりあたに散てや白露の水行きしの淡となるらむ

待花

三 はなよいかに誰とゝもにかなかめせんひなの住居に咲を待ても

初花

四 雨もよにさける軒はの朝戸あけて思はぬ花の色をみる哉

見花

五 くるとあくど花の思はぬことはりにわか心もちらさてそみる

花盛

六 よをこめて花咲かゝる枝も葉も埋れはつる雪とみるまで

落花

七 ひたすらに猶やうらみんさき散も常ある花と思はさりせは

歎冬

八 はやせ川おられぬ水にうつろひて花や散らん岸の山吹

池藤

九 水の面にかけをひたして紫の曙うはふ池の藤なみ

暮春

二 散花も過るよはひも更に今日春のわかれにおとろかれつゝ

更衣

二 かふるとて花のにはひも夏衣はるをはよそに墨染の袖

卯花

三 夕されは雪かとそみるうの花の垣ほの竹の枝もたはゝに

待郭公

三 ほとゝきすなにを契りに今こんといひし人をも待こゝちして

聞郭公

二 ほとゝきすきゝしとやいはんうたゝねの夢のまかひのよはの一こゑ

郭公稀

二 手を折てかそへやせまし時鳥まれなるこゑとつもる日数と

故郷橘

二 故郷の軒はおふる草の名を花たちはなや香に匂ふらん

早苗

三 うへわたすふもとのさなへ一方になひくとみれば山風ぞ吹

五月雨

六 さみたれの比はしなどの風とても吹やははらふあめの八重雲

鵜川

五 うかひ舟河せの月にかはりてやのほれはくたる篝火のかけ

夏草

三 花はまた咲もさかぬも夏草のわくひとなしに茂る比哉

叢螢

三 むかしたかあつめし窓の名残とて茂き草葉にやとる螢そ

夏月

三 明やすき名残を所思ふ秋のよもなかしとはなき月のなかめを

夕立

三 風のをとむら雲なからきおひきて野分にくたる夕立の空

杜蟬

(三四の歌は題下に書入れ 校者)

(三) なくせみのこゑをしくれにまかへても立よるもりの下露はなし

三 せみのこゑさなからまかふ時雨かな立よる袖にもりの夕露

夏祓

三 けふは身の内外すゝしき御祓河にこる心の水もなかれて

早秋

三 大方の野への草葉の露をゝきて袖よりなるゝ秋の初風

七夕

三 あふことは稀なるなかなかれても契りはふかき天の河浪

萩風

三 一葉さへまた散あへぬこの本に先打そよく萩のうは風

萩露

三 枝なからみよといひしを忘れては折袖にけぬ露の村萩